コッホのドイツ語原著における58指標の判定基準[1)]

中　島　ナオミ*

Criteria for the classification of the 58 indexes in "*Der Baumtest*（*3te Aufl.*）"

Naomi Nakashima

要旨：バウムテスト解釈の着眼点となる木の絵の形態的特徴のうち、58の特徴（58指標）については出現率が大規模に調査され、その成果を踏まえてドイツ語原著の初版（1949）は大改訂されて第2版（1954）が著された。学年別・性別・知的水準別・職業別の詳細な出現率表が発表され、コッホの最後の原著である第3版（1957）にも引き続き掲載されたが、わが国ではあまり関心は示されていない。しかしながら、出現率からそれぞれの指標の特徴を検討することは、コッホの解釈理論の理解に役立つ。そのために、58指標の判定基準を第3版に準拠して紹介した。

Abstract: Among the morphological characteristics of a projective tree drawing that was a focus of interpretation in the Baum Test, the appearance rates of the 58 characteristics（the 58 indexes）were investigated on a large scale. Based on the results, the first edition of the Koch's original work written in German（1949）was largely revised and published as the second edition（1954）, in which the tables of the appearance rates in detail by school year, distinction of sex, intellectual level and occupation were shown. The tables remained also in his last, original 3 rd edition（1957）, to which much attention, however, have not been shown in Japan. Notwithstanding, discussion on the characteristics of each index from the appearance rates may contribute to better understanding of the Koch's theory of the interpretation. For this purpose, we presented here the criteria of the 58 indexes, based on the 3 rd edition.

Key words：バウムテスト The Baum Test（Koch's tree-drawing test）　形態的特徴 morphological characteristic　58指標 The 58 indexes　判定基準 criteria for the classification

Ⅰ　はじめに

バウムテストの解釈は、描かれた木の絵に表れた様々な描画特徴を読み取って行われる。解釈の着眼点となる形態的特徴の内、58の特徴（以下、58指標とする）の出現率が大規模に調査され、その成果を踏まえてコッホ（Karl Koch）は88頁の初版（1949）を大幅に改訂し239頁から成る第2版（1954）を著した。指標の解釈仮説は精神分析的な視点だけではなく発達的な視点からも検討されているが、第2版においてこの視点がさらに強調されたと言える。

約4,400枚のバウム[2)]（第2版　序）を基に算出された学年別・性別・知的水準別・職業別

*関西福祉科学大学社会福祉学部　准教授

表 1　第 3 版巻末の一覧表（健常児集団の一部）

Mädchen und Knaben	Schule	Kindergarten		1. Primarklasse		2. Primarklasse		3. Primarklasse		4. Primarklasse	
	Alter	6–7 Jahre		7–8 Jahre		8–9 Jahre		9–10 Jahre		10–11 Jahre	
	Zahl	255	%	216	%	229	%	221	%	211	%
1 Waagrechte Äste, rein		2	0,8	—	—	—	—	—	—	—	—
2 Waagrechte Äste, vereinzelt		12	4,7	7	3,2	—	—	10	4,5	10	4,75
3 Gerade Äste		71	28,0	12	5,6	24	10,5	10	4,5	4	1,9
4 Kreuzformen		26	10,1	22	10,1	15	6,5	7	3,1	9	4,25
5 Strichstamm		4	1,6	2	0,9	2	0,9	—	—	3	1,4
6 Doppelstrichstamm		251	98,0	214	99,1	227	100,0	221	100,0	208	98,6
7 Strichast		157	61,0	113	52,0	89	39,0	58	26,2	62	28,4
8 Strichast, vereinzelt		5	2,0	4	1,8	5	2,2	8	3,6	8	3,8
9 Doppelstrichast		45	17,5	52	24,0	114	50,0	158	71,0	141	78,0
10 Winkelast, rein		49	19,2	2	0,9	3	1,3	10	4,5	1	0,47

表 2　第 3 版本文中の表（一線枝）

Merkmal: *Strichast*　　Nr. 2

Schule		K	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8. P	1. S	2. S	3. S
Alter		6–7	–8	–9	–10	–11	–12	–13	–14	–15	–14	–15	–16
Knaben	%	53,0	42,5	16,6	17,6	21,5	2,9	21,3	8,8	6,0	1,9	1,0	12,9
Mädchen	%	68,0	63,4	66,0	34,5	38,0	17,0	42,0	20,4	33,8	20,0	7,6	7,7
Zusammen	%	60,5	53,1	41,3	26,0	29,2	10,0	26,7	14,6	19,9	11,0	4,3	10,3
Alter		–8	–9	–10	–11	–12	–13	–14	–15	–16	–17	Deb.-Imbez. Mittel 29 J.	
Debile	%	46,0	57,0	50,0	57,0	55,0	58,0	64,0	52,5	37,0	26,8	62,5	

Angelernte Arbeiter(innen) mit 8 Primarklassen					Kaufm. Ang.	afrik. Missionsschüler
Alter		15–16	17–19	+20	19–32	im Mittel 15,5 J.
	%	18,4	20,8	32,7	23,0	59,0

の詳細な出現率は集団別の一覧表（表 1 にその一部を示す）として巻末に 10 頁にも亘って掲載され、本文中には全集団の出現率を指標別にまとめた表（表 2）が当該箇所に挿入されている。

その後、コッホはグリュンワルトの空間図式を導入して解釈理論をより充実させ、それまでの教示の文言から「用紙の全面を使ってもよろしい」の箇所を削除し、さらにヴィットゲンシュタイン指数を取り入れた事例解釈を載せた第 3 版（1957 258 頁）を出版した。しかし、コッホは 1958 年に 52 歳で急逝（吉川　1978）したのでこれが最後の原著となった。第 3 版にも当然、第 2 版にある巻末の一覧表や本文中の表はそのまま掲載されている。これらの指標について、出現率から捉えた特徴を知ることはコッホの解釈仮説の理解に役立つことは言うまでもないが、未だこの 58 指標に関してはまとまった形でわが国には紹介されていない。その理由としては、バウムテストはパーソナリティ理解のための優れた手法であると評価され、遍く利用されるようになったにもかかわらず、コッホの真の原著とも言える第 3 版には次のような事情があって注目されなかったからと考えられる。

コッホのバウムテストは、英語版（1952）の邦訳（林・国吉・一谷訳　1970　以下、日本語版とする）という形でわが国に紹介されたが、この英語版はドイツ語で著された初版の英訳版に相当し（中島　1986 a）、大改訂前の旧い原著である。しかしながら邦訳者らは、英語版を第 3 版の「簡便なマニュアル形式」（林　1978）であると誤解していた。つまり、バウムテスト

に関するコッホの原著を、1949 年にドイツ語で著された原著と英語版の 2 冊に限定し、第 3 版を最初の原著（岸本（2005）のいう『仮想初版』）、英語版を最後の原著とみなしていたのだ。真の初版と第 2 版の存在については筆者が指摘（中島　1985 b・1986 a）するまでは気付かれず、肝心の第 3 版は英語版の内容を補足するものとしか当時は認識されていなかったようである。それ故、第 3 版を一貫して読むという姿勢を欠いたことからバウムテストの紹介そのものにも混乱が生じ、その結果バウムテスト利用者の原著者コッホに対する不信を招き、第 3 版への関心が薄れたと言えよう。（中島　2006 a）。

さて、筆者が第 3 版に取り組むことになったきっかけは、幼児を対象にした精神保健（当時は精神衛生）を実践するために投映描画法である本テストに着目したことから始まる。臨床心理アセスメント法として既に多少の経験があり、何よりも描画法は言語による表現能力に乏しい幼児に適していると判断してバウムテストを精神保健活動の手法に選択した。その理由は、幼児自身が自己や環境をどのようにとらえているのかを周囲の大人に質問紙を実施して間接的に知るのではなく、直接的に、つまり投映法によって把握でき、しかも実施法が簡便な故にスクリーニング法としても適していたからである。そこで、バウムテストの標準を知るために先行研究（国吉ら　1962、一谷ら　1968、日本語版　1970、山中ら　1970、朝野　1973、佐藤ら　1978、『バウム・テスト整理表および手引』 1980、中田　1982 など）を調べたが、当時の筆者が最も必要としていた幼児期に関係する指標である「根元までの枝」・「T 幹」・「十字型」・「水平枝」などの判定基準が共通でないという実態を知りとても驚いたことを覚えている。例えば「根元までの枝」であれば、根元まで水平枝が描かれていること、あるいは水平枝でなくてもいいとか、あるいは一線枝が描かれていることなどが条件として挙げられ、コッホのバウムテストと謳われながら判定基準が異なっていた。多数を対象にする判定作業では、実際には典型よりも亜型の出現の方がはるかに多い。そのため、判定基準のポイントが正しく把握されていないと判定が混乱する。加えてコッホと同じ基準でなければ結果の比較も出来ない。判定基準は筆者にとっては重大な関心事であり、どれがコッホの基準かを知るためには直接、原著で調べるしか方法がなかった。さらに日本語の指標名にも共通性がなく、二線幹の出現率（中島　1985 b）や教示の問題（中島　2002）もあって日本語版によるバウムテスト理解に限界を感じていた。そこで、1983 年秋頃から第 7 版[3]の発達に関する章を榎本　居氏の協力を得て訳しはじめ、同時にコッホの最終原著の確認作業を開始した。英語版の発行年である 1952 年以降には改訂第 2 版（1954）、改訂第 3 版（1957）、非改訂第 4 版（1962）、非改訂第 6 版（1972）とそして非改訂第 7 版（1976）が公刊されていることを確認した。そこで、1984 年秋には邦訳者らに「英語版には、問題がある。英語版はドイツ語原著（当時、入手した第 7 版を指す）の簡略版ではなく、ドイツ語原著は改訂されている」ことを二線幹の出現率などを例にして伝えたが受け入れられなかった。初版については現物の所在を日本国内では全く確認できなかったので、1985 年 4 月にレグラ・コッホ（Regula Koch）に問合せ（中島　私信）、1986 年 1 月に「初版は 88 頁から成り、英語版は初版の英訳版である」との返事（R. Koch　私信）を得た。その結果、それまでは邦訳者らによって唯一のドイツ語による原著とみなされていた 1949 年版は真の新版ではないこと、そして第 3 版[4]が最終原著であることを明らかにした（中島　1985 b・1986 a）。

日本語版の問題点を指摘し原著の発達に関する章を紹介（中島　1985 a・1985 b・1985 c・1986 a・1986 b）して以来、中断しながらもコッホの原著に取り組んできた（中島　2006 a・2006 b・2007）ので、本稿ではこれまでの発表

も含めて 58 指標全ての判定基準を紹介する。

Ⅱ　指標設定におけるコッホの着眼点

木の絵の形態が描き手の年齢に応じて変化することに着目したコッホは、各指標の解説に先立って設けた「描画表現の発達」の節（「発達テストとしてのバウムテスト」の章の一節）で、木の絵の表現様式の発達過程について述べている。彼は発達研究法の一つとして催眠による退行実験を行い、暗示によって 2 歳から 9 歳の各年齢に退行した成人が描いた絵の変化を次のようにまとめている（中島　1985）。一本線で表わされた幹から二本線の幹へ、同様に一本線の枝から二本線の枝へ、枝の方向は水平から上向へ（図 1）、分枝（主枝から出た小枝）の方向は主枝（幹から出た太い枝）に対して直角の方向から成長方向へ、つまり主枝に対して斜め方向に（図 2）伸び、そして全ての枝が幹の側から生えている樅のような形から、幹と幹の上端から広がる樹冠に区別された形（図 3）へと変化すると概括し、その特徴を「一線幹」・「二線幹」・「一線枝」・「二線枝」・「水平枝」・「直交分枝」（主枝に対して直角に伸びた分枝をもつ枝の意）・「T 幹」（樅のようにまっすぐに伸びた形の幹で、T は Tanne（樅）に由来）・「幹上直」（幹と樹冠が区別された形で幹の先端が水平線で閉じられている状態）・黒塗りなどの用語で説明されている。この箇所を読んで、「T 幹」・「水平枝」・「直交分枝」の判定基準に対する筆者の疑問は一気に解消した。

さらに、実際に数百例を対象にした調査に基づいて幼児期に特徴的なバウムの表現様式を「早期型」としてまとめ、その特徴を示す「十字型」・「日輪型・花型」・「幹の中の実や葉」・「幹のみ・幹と付属の枝」などの指標が第 2 版から新たに追加された（中島　2006 b）。

以上のことから、コッホは木の描画表現の発達的変化を敏感に反映し得る特徴を指標として主に採用したと考えられる。実際に、58 指標のうちの約 4 割が早期型に関する指標である

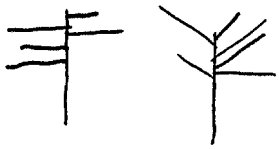


図 1　主枝の方向の変化（水平から上向へ）
Koch（2000）p. 52 より

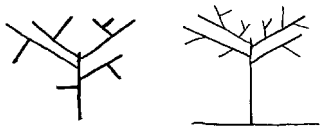


図 2　分枝の方向の変化（直角から斜めに）
Koch（2000）p. 53・54 より

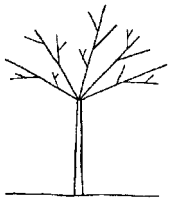


図 3　幹と樹冠に区別された形
（「幹上直」・「半 T 幹」）
Koch（2000）p. 54 より

（表 3 参照）。

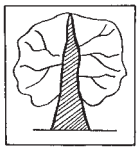
Ⅲ　58 指標の分類と判定基準

第 3 版の巻末にある 58 指標には、表 1 に示すように 1～58 の通し番号が付けられているが、その番号の意味は不明で、羅列にちかい。表 3 に本文中での提示順（頁数で示す）に従って 58 指標を巻末で示されている指標名[5]のまま原語で示し、当該指標の記述がある箇所の目次も示した。さらに、全集団の出現率を指標ごとにまとめた表（46 の指標）や出現率のグラフ（10 の指標）が本文中に示されている指標、そして早期型として扱われている指標を表 3 の当該指標欄に示した。コッホは、コスト上の理由からグラフに意味があれば載せ、意味のない表は省いたと述べているので、表やグラフが添えられた指標は 58 指標の中でも意味がある指標といえる。中でも、表とグラフの双方が

表 3　58 指標

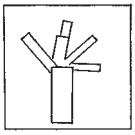
第 3 版の目次	頁数	Merkmal	表	グラフ	早期型
一線幹	63	5 Strichstamm	○		○
一線枝	63	7 strichast	○	○	○
	65	8 Strichast, vereinzelt	○		
二線枝	65	9 Doppelstrichast	○	○	
まっすぐな枝	67	3 Gerade Äste	○		○
水平枝	68	1 Waagrechte Äste, rein			○
	68	2 Waagrechte Äste, vereinzelt			
十字型	68	4 Kreuzformen	○		○
空間倒置	68	27 Raumverlagerungen	○		○
日輪型と花型	70	16 Sonnenrad und Blumenform	○		○
低い位置にある枝	70	12 Äste bis zum Borden	○		●
	70	13 Tiefliegende Äste, vereinzelt	○		
枝がなく上が閉じた幹、又は貧弱な枝のある上が閉じた幹	72	14 Blätter und Füchte in Stamm			○
	72	15 Stamm ohne Krone, kurze Äste			○
幹下縁立	72	33 Stammbasis auf Blattrand	○	○	●
まっすぐな根元	75	34 Stammbasis gerade	○	○	●
催眠実験	118	51 Degenerationsformen	○		
根	125	28 Strichwurzel	○		
	127	29 Doppelstrichwurzel	○		
円錐幹	129	32 Kegelstamm	○		
半 T 幹、T 幹	129	30 T-Stamm	○		●
	129	31 Halb-T-Stamm	○		
幹の凸凹	133	45 Stammkeröpfe, Kerben	○		
クーゲルバウム	140	35 Kugelkrone	○		
枝先開	145	38 Rohrenaste	○		
巻き毛のような樹冠（動き）	151	36 Kugelkrone in Lockenmanier			
混乱した線の樹冠（形の解体）	152	37 Krone mit Liniengewirr, Kritzelei			
幹上直、枝先直	154	42 Lötstamm	○	○	○
	154	43 Lötast	○		○
積み重ね、建増し	157	46 Additive Formen, Aufstockungen	○		△
直交分枝（早期型）	159	10 Winkelast, rein	○		○
	159	11 Winkelast, vereinzelt	○		
さまよい	161	39 Schweifungen, überlange Äste	○		△
	161	40 Schweifungen, Raumfüllungen			
ステレオタイプ	164	47 Stereotypien	○		○
黒塗りの幹	167	17 Dunkelfärbung, Stamm	○	○	○
陰影であらわした樹冠	170	19 Krone in Schattenmanier（nicht Aste）	○		
黒塗りの枝	171	18 Dunkelfärbung, Ast	○		○
黒塗りの実や葉	171	24 Früchte und Blätter geschwärzt	○		
逆向き	176	53 Gegenzüge an den Ästen	○		
杭、小さな杭、幹の支柱、枝の支え	181	48 Pflock und Stutzen	○		
切断された枝	183	44 Astschnitt, Astbruch, Stammbruch	○		
三次元（正面の枝）	185	52 Dritte Dimension（ohne Augen）	○		
配置	190	58 Über den obern Blattrand hinausgezeichnet	○		
風景	191	55 Viel Landschaft	○		○
	192	56 Landschaft nur angedeutet	○	○	
丘の上の幹、島の中の幹	197	57 Inseln, Hügelformen			
付属物	197	54 Zuberhör, Vögel, Häuschen, Herzchen	○		
	199	49 Leitern	○		
	200	50 Schutzgitter, Draht			
花	202	22 Blüten			
葉	204	21 Blätter	○	○	
実	205	20 Früchte	○	○	
	209	23 Übergrose Früchte und Blätter	○	○	○
空中の実（クーゲルバウム）	211	25 Früchte frei in Raum（Kugelbaum）	○		○
落ちる／落ちた実や葉や枝	212	26 Früchte/Blüten/Äste fallend/abgefallen	○		
本文中に記述なし		6 Dopperstrichstamm			
		41 Themawechsel in Krone			

●早期型としては、「根元まである T 幹」、「幹下縁立でまっすぐな根元」
△ある程度の早期型として扱われる指標。早期型については中島（2006 b）を参照。

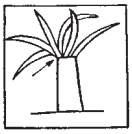


T幹
図 4-1

半T幹
図 4-2



幹上直･枝先直
図 4-3



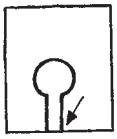
旧模式図
図 4-4

幹のみ
幹の中の実や葉
図 4-5(早)

幹と付属の枝
図 4-6(早)

円錐幹
図 4-7

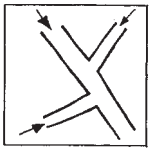
幹の凸凹
図 4-8



幹下縁立
まっすぐな根元
図 4-9

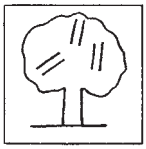
全水平枝
図 4-10(早)

一部水平枝
図 4-11(早)



枝先開
図 4-12

枝先開
図 4-13

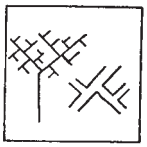


枝先開
図 4-14

根元までの枝
T幹
図 4-15(早)

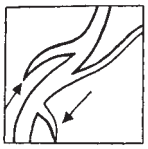
根元から出た枝
図 4-16

前方に突き出た枝
図 4-17



全直交分枝
図 4-18

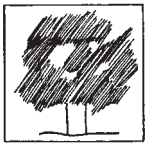
全直交分枝
図 4-19(早)



逆向きの分枝
図 4-20

日輪型
図 4-21(早)

花型
図 4-22(早)

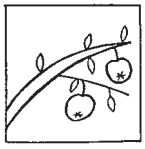


陰影で表わした樹冠
図 4-23

クーゲルクローネ
図 4-24

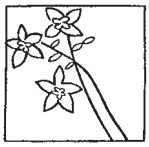
巻き毛のような樹冠
図 4-25

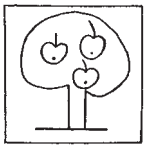
なぐりがきの樹冠
図 4-26



実
図 4-27

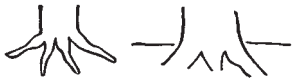
葉
図 4-28


花
図 4-29


空中の実
図 4-30

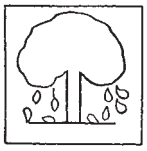
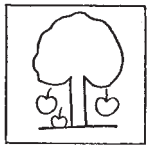
大きすぎる実や葉
図 4-31（早）

空間倒置
図 4-32（早）

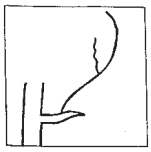

二線根
図 4-33

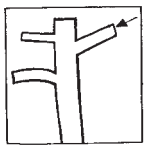
黒塗りの幹
図 4-34

黒塗りの幹
黒塗りの枝
図 4-35（早）



落ちる／落ちた実･葉･枝
図 4-36

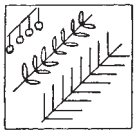
さまよった
長すぎる枝
図 4-37

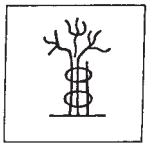

主枝より
長い分枝
図 4-38


切断された枝
図 4-39

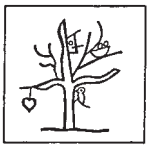
積み重ね
図 4-40

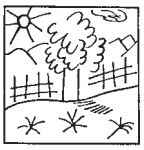
同左（初版）
図 4-41


ステレオタイプ
図 4-42

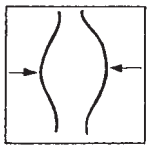

小さな杭や柱
図 4-43

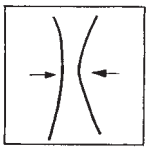
はしご・多くの風景
図 4-44（早）

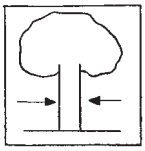

付属物
図 4-45


多くの風景
図 4-46

島や丘の形
図 4-47

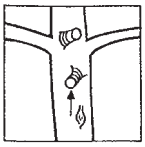

膨らみ
図 4-48


くびれ
図 4-49


平行幹
図 4-50

直線で角ばった形
図 4-51

同左（初版）
図 4-52


正面の枝の切り口
図 4-53

旗型の樹冠
図 4-54

図 4　コッホの模式図（早）は早期型の一覧図（Koch（2000）p. 59）より抜粋

表 4　58 指標の分類表

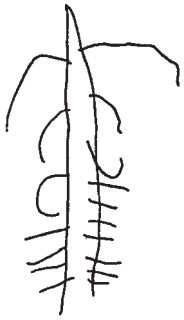
部位	分類の視点	指標名
幹	幹の輪郭	5　一線幹
		6　二線幹
	幹先端の位置	30　T 幹
		31　半 T 幹
	幹先端の処理	42　幹上直
		58　幹上縁出
	幹の形状	15　幹のみ、幹と付属の枝
		32　円錐幹
		45　幹の凸凹
	根元	33　幹下縁立
		34　まっすぐな根元
枝	主枝の輪郭	7　全一線枝
		8　一部一線枝
		9　全二線枝
	主枝の方向	1　全水平枝
		2　一部水平枝
		4　十字型
	主枝の形状	3　まっすぐな枝
	枝先の処理	38　枝先開
		43　枝先直
	主枝の位置	12　根元までの枝
		13　根元から出た枝
		52　前方に突き出た枝
	分枝	10　全直交分枝
		11　一部直交分枝
		53　逆向きの分枝
樹冠	形や構成	16　日輪型・花型
		19　陰影で表わした樹冠
		35　クーゲルクローネ
		36　巻き毛のような樹冠
		37　なぐりがきの樹冠
実・葉・花	あり	20　実
		21　葉
		22　花
	場所	14　幹の中の実や葉
		25　空中の実
	大きさ	23　大きすぎる実や葉
	付き方	27　空間倒置
	2 種類以上の実	41　樹冠における主題の変化
根	根の輪郭	28　一線根
		29　二線根
表現	黒塗り	17　黒塗りの幹
		18　黒塗りの枝
		24　黒塗りの実や葉
	落下表現	26　落ちる／落ちた実や葉や枝
	さまよい	39　さまよった長すぎる枝
		40　さまよって空間をうめる
	切断表現	44　切断された枝、折れた枝、折れた幹
	積み重ねた描き方	46　積み重ね
	常同的な描き方	47　ステレオタイプ
	いびつな形	51　変質型
木以外の描き込み	木以外の書き込み	48　小さな杭や支柱
		49　はしご
		50　有刺鉄線で保護
		54　付属物
		55　多くの風景
	地平線、地面	56　風景の暗示
		57　島や丘の形

示された 10 指標のうち 6 指標は早期型に関する指標であり、このことからも発達的な観点が軽視されていないことが分かる。

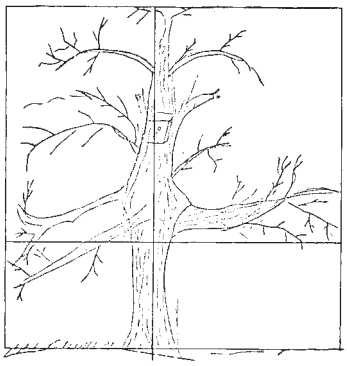
次に、判定基準の特徴から 58 指標を分類し、表 4 を作成した。先ず、バウムの 5 つの部位（幹、枝、樹冠、実・葉・花、根）に関する指標（計 41 指標）と表現方法に関する指標（10 指標）、そして木以外の書き込みに関する指標（7 指標）に分け、さらに指標設定における視点別に下位分類した。図 4 には、第 3 版に掲載されている指標の模式図をまとめて示し、図 5 には 58 指標の中の当該指標が使われているコッホの事例を、図 6 には中島の事例を示した。

日本語の 58 指標名としては、先行研究で使用された指標名を参考に、原語を尊重しつつできるだけ簡潔に判定基準を表す訳語を心掛けた。なお、指標名に付記した番号は、第 3 版の巻末の一覧表で各指標に付けられていた通し番号である。

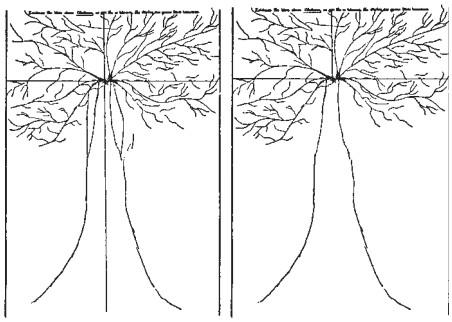
多数あるコッホの指標の中には、指標名だけで基準が容易に理解できるものからそうでないものまである。筆者の語学力不足という理由の



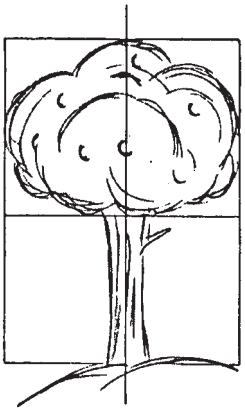
T 幹(早期型)
根元までの枝
図 5-1 事例(4 歳 9 ヶ月・女児)



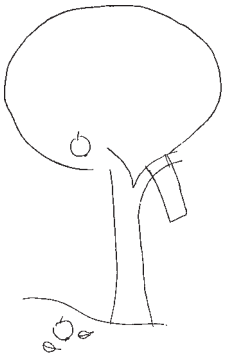
T 幹・正面に突き出た枝
枝先開・付属物・切断された枝
図 5-2 事例(35 歳・男性)



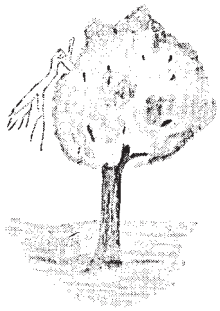
円錐幹　　不要な描線を消去
逆向きの分枝
図 5-3 事例(18 歳・男性)



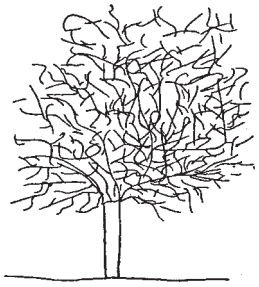
クーゲルクローネ
丘形の地平線(風景の暗示)
図 5-4 事例(16 歳・女性)



クーゲルクローネ
空中の実・地平線
図 5-5 事例(28 歳・女性)

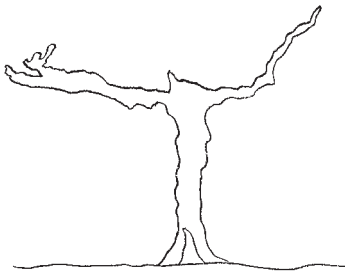


クーゲルクローネ
風景の暗示
図 5-6 事例(15 歳・男性)



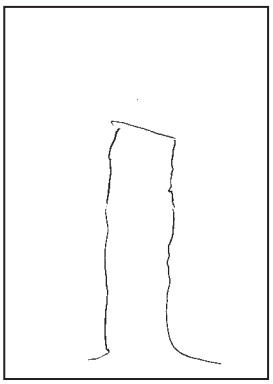
さまよって空間をうめる(催眠下)
図 5-7

変質型
図 5-8 事例(15 歳・男性)

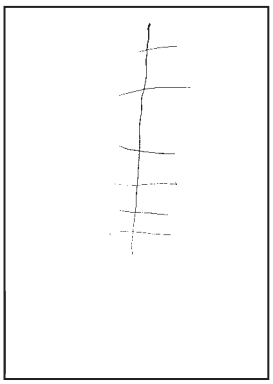


変質型(催眠下)
図 5-9

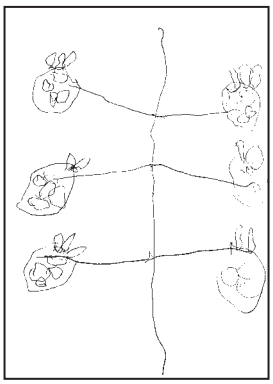
図 5　コッホの事例



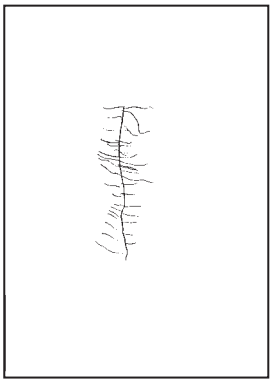
「？」
事例（4 歳 9 ヶ月女児）
図 6-1



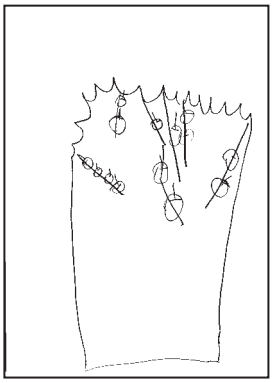
「実の木」
事例（4 歳 4 ヶ月男児）
図 6-2



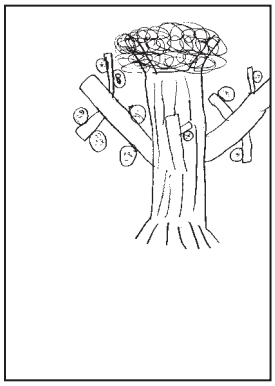
「いちごの木」
事例（5 歳 2 ヵ月男児）
図 6-3



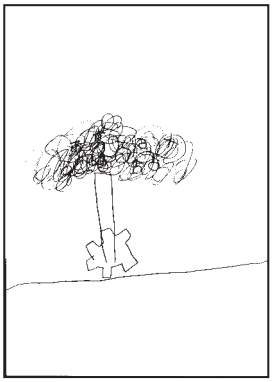
「？」
事例（3 歳 8 ヶ月男児）
図 6-4



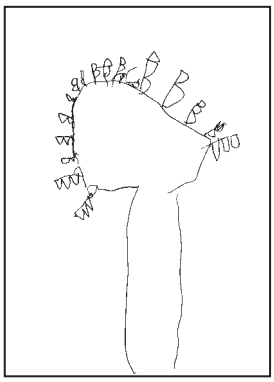
「りんご」
事例（6 歳 3 ヶ月女児）
図 6-5



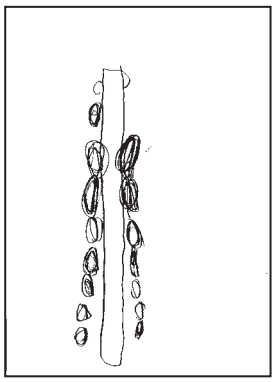
「みかん」
事例（中 2 養級男児）
図 6-6



「柿」
事例（5 歳 3 ヶ月男児）
図 6-7



「はっぱの木」
事例（6 歳 1 ヶ月男児）
図 6-8



「背高のっぽの木」
事例（4 歳 10 ヶ月男児）
図 6-9

図 6　中島の事例

他に、指標の中には判定基準自体が分かりやすく記述されていないものもある。その場合には、コッホが示した事例を参考にしながら判定基準を理解したことを断っておく。

表 4 の下位分類の順に従って、個々の指標の判定基準を紹介する。

1　幹について

(1) 幹の輪郭

幹の輪郭がなく、一本線で描かれているのが「一線幹」で、輪郭のある幹が「二線幹」である。

(2) 幹先端の位置

幹の先端が木の先端にまで達しているのが「T 幹」（図 4–1）である。前述したように、樅のように木の先端まで幹が途中で枝分れしないでまっすぐに伸びている状態を指すが、地面に対して必ずしも垂直（中田　1980）でなくてもよい。幹の先端の位置は、厳密な意味での木の先端でなくてもほぼ先端であればよい。解釈上、「T 幹」には早期型としての「T 幹」（図 5–1）と本来の意味での「T 幹」（図 5–2）がある。

拙稿（中島　1985 b・2006 a）でも述べたが、T 幹については日本語版作成の段階で、T 幹の幹・松科の木・T 字型の幹などと訳されたために後々混乱が生じた。Tanne（樅）の T に由来する指標名であることが理解されていたら生じなかった混乱である。

「半 T 幹」（図 4–2）は、幹上直の幹の先端から主枝がでた形（側枝がある場合も含める）であり、本来の意味での「T 幹」の前段階として出現する。「半 T 幹」においても、「T 幹」と同様、地面に対して垂直であることや樹冠の輪郭は必要条件ではない。また、「先端が冠部の途中で終わる幹上直の幹」（中田　1980）だけの規定では不十分で、「幹上直」の幹先端から枝が伸びているのが「半 T 幹」である。

(3) 幹先端の処理

幹の先端がはんだづけされたように閉じられていることからコッホは「はんだづけ幹」（図 4–3）と命名したが、用語としては一谷ら（1968）によって使われている「幹上直」とする。その理由は、幹の先端が直線で閉じられているというこの指標の典型的な特徴が指標名から読み取れるからである。幹先が自然に細くなって閉じる、あるいは幹先が枝分れする前の段階の処理様式である。

ところで日本語版、すなわち英語版にある模式図は実はコッホによって廃止された旧い模式図である。枝先が細く閉じた曲線で描かれた枝のある幹でしかも地平線上に立つ「幹上直」の木（図 4–4）が描かれているが、この模式図は、初版・英語版・第 2 版で使用された後、第 3 版で「幹上直」のように枝先が閉じた枝（これを「枝先直」という）があり、幹の下端も直線で閉じた幹（これを「幹下直」という）に訂正された。「幹上直」の幹には「枝先直」や「幹下直」が対応することが多いので、恐らくコッホは典型例に置き換えたのであろう。

「幹上直」を薦めるもう一つの理由は、幹の下端が「幹上直」のように直線で閉じられていることを示す「幹下直」と対で使えるからである。コッホは「幹下直」を独立した指標としては扱っていないが、幹の下端にも「幹上直」のような特徴が生じることにも触れ、「幹上直」の模式図にその特徴を示し、さらに 6 歳から 7 歳の子どものバウムで描かれる根元の模式図の一覧図（図 7）の中にも「幹下直」が示されている。「幹下直」とは「幹上直」同様、一谷ら（1968）で初めて使用された用語であり、幼児期のバウムの特徴を示す指標である。根元の処理様式についてはスイスとの違いが大きく、わが国ではこの「幹下直」を独立した指標として扱う意義がある。

さて、初版の“Löt-Stamm”は英語版では“welded trunk（溶接された幹）”と英訳され、それが日本語版で「「つぎ木」した幹」（p. 80）と訳出されている。模式図では、幹と枝が直線で区切られているので「つぎ木」と訳出さ

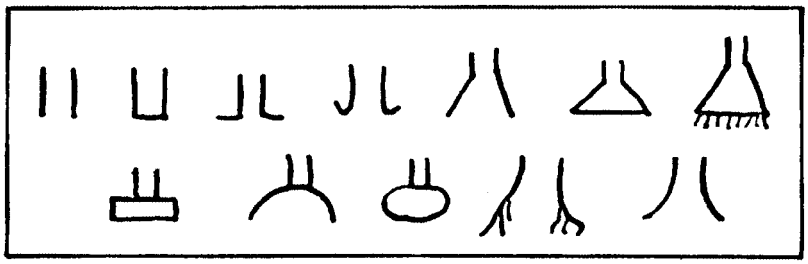


図 7　根元の表現様式（6～7 歳）Koch（2000）p. 75 より

れたのかもしれないが、“Löt-Stamm”は本来の意味での「つぎ木」とは無関係である。指標設定におけるコッホの視点が理解されていたならば「つぎ木」以外の指標名が工夫されたに違いない。日本語版の公刊前に発表された国吉ら（1962）の論文[6]では「Lötstamm」として原語のまま紹介されてはいるが、コッホの意図通りに理解され、同様に、一谷ら（1968）の論文でも前述したようにコッホの意図が理解され「幹上直」と訳出されていた。しかしながら、日本語版作成時には、“welded trunk”と“Löt-stamm”との関係が解明されないまま、両者は別個の指標として扱われている。この傾向は、日本語版の公刊後 10 年目に邦訳者らが中心になって作成した『バウム・テスト整理表および手引』（1980）においてもまだ続き、そこでは「つぎ木した幹」と「はんだづけ幹（幹上直）」が幹の先端処理に関する指標として同時に採用されている。「つぎ木した幹」の模式図として日本語版にある模式図、即ちコッホによって廃止された旧い模式図が指示され、「はんだづけ幹（幹上直）」の例として日本語版補遺の「幹上直」の事例が指示されている。この手引の作成には、「コッホの挙げている各項目の判断基準が曖昧にとらえられて解釈されたり－（略）－」（一谷・津田　1982）という背景があったことが述べられているが、英語版に拘泥した研究姿勢故に根本的な解決には至らなかったと言える。但し、手引の作成目的は「コッホの示す判断の各項目を確実かつ忠実にチェックできるようにするとともに、その判断基準を明確化して一覧表にすることであろう。同時に、過去の研究成果に基づいて、チェック項目とすることが望ましいと思われるものをも付加して、解釈の前提条件となる共通の項目をチェックできるようにすること」であり、この目的には全く異論はない。

次に、「幹上縁出」とは幹の先端が用紙の縁からはみ出している状態をさす。コッホは、はみ出した状態と説明しているが、実際のバウムでは用紙の 2、3 ミリ手前で描線が明らかに意図的に止められ、厳密にははみ出したとは言えない事例もある。解釈においては両者を同列に扱えないが、指標としての判定作業でははみ出し寸前で止められたものも「幹上縁出」として扱うことにしている。

ところで、幹先端処理に関しては「幹上直」・「半 T 幹」・「幹上縁出」の 3 指標しか 58 指標に含まれていない。幹先端の処理様式は重要な着眼点なので、この 3 指標だけでは不十分である。

(4) 幹の形状

「幹のみ・幹と付属の枝」（図 4–5・6）とは、枝がない、あるいはあったとしても短くて毛の様に密生した枝が根元まで生えている状態の幹をさす。このような形態の幹は、筆者が試みているバウムの樹型分類（中島　1982・1983・1984・2008）では「幹」や「幹と付属」に含まれる。「幹のみ・幹と付属の枝」は早期型として位置づけられているので、典型は木全体のイメージが幹の部分だけで表現されている段階のバウムである。丁度、初期の人物画において

頭だけが描かれるように、描いた幼児にとっては木の全体像の表現であろう。だから、枝が描けるのに枝がないバウム（図 6–1）とは区別しなければならない。

「円錐幹」（図 4–7）は、根元が広くて樹冠まで円錐形のように細くなった幹を指すが、コッホの模式図ではその形状を理解しにくい。根元に拡がりのない「まっすぐな根元」から自然の木のように根元に拡がりが生じるのは通常の発達的変化である。しかし、ここでの拡がりとは単に根元が拡がっている状態だけではない。模式図からはその特徴を理解しにくいが、「幅広い根元から幹の先に向かって細くなっている明らかな円錐幹」と事例（図 5–3）で説明されているように、その拡がり方に特徴がある。コッホは初版では“Keilstamm（くさび型の幹）”と命名し幹の根元に関する指標の一つに位置づけたが、第 2 版からは根元に関する指標から外して“Kegelstamm（円錐幹）”に改称し、さらに第 3 版では「円錐幹」の見出し[7]を設けて説明した。模式図はそのままであるが、「円錐幹」は根元の拡がりだけではなく、幹全体の形状に着目した指標である（中島　2006 a）。

ところで、初版の“Keilstamm”は“wedge trunk”と英訳され、日本語版で「くさび型の幹」（p. 58）と訳されたことには何の問題もない。しかし、この指標を使った事例説明の箇所（p. 43）では、初版の“Keilformig und breit（くさび形で広い）”が“conical and wide（円錐形で広い）”と表現されているので、日本語版では「円錐形で基部が広くなっている」と訳されている。英語版のこの箇所でのみ、改称された指標名が第 2 版に先駆けて使用されている。だから日本語版では、円錐形とくさび型という新旧二つの用語が使われたことになり、「くさび型の幹」と“円錐形で基部が広くなっている”幹が同じ特徴を指すことは注釈がない限り理解し難い。

「幹の凸凹」（図 4–8）は模式図通りの特徴を指し、幹の「膨らみ」や「くびれ」（図 4–48・49）とは異なる指標である。

（5）根元

「幹下縁立」（図 4–9）は用紙の下端から幹が描かれているもの。実際には、幹の描線が用紙からはみ出している場合と、「幹上縁出」と同様にたとえ 2、3 ミリ手前であっても意図して止められている場合もあるが、指標としての判定作業では両者を共に「幹上縁出」として筆者は扱っている。

「まっすぐな根元」（図 4–9）とは、根元に拡がりのない幹をさすが、根元部分を除く幹の太さが一定の「平行幹」（図 4–50、この模式図では根元も含めて同じ太さ、わが国では柱の太さが変わらない電柱にたとえて電柱幹ともいわれている）や、あるいは幹の下端が直線で閉じられる「幹下直」と混同されやすい。

2　枝について

分枝や側枝のように特に断らない限り、原著では主枝であっても枝として一般的に表現されているが、ここでは使い分けることにする。

（1）主枝の輪郭

全ての主枝が一本線で描かれているのが「全一線枝」で、全ての枝に輪郭があると「全二線枝」、二線枝の中に一線枝が混じって描かれているのが「一部一線枝」である。原語には全や一部が付けられていないが、水平枝や直交分枝では“全”と“一部”が明記されているのでそれに合わせた。ところで、日本語版（p. 79）の二線枝の説明文に対して、「英語版にはなかったので、ドイツ語原著から引用」との訳注が付けられている。しかし、当該箇所は第 3 版には存在するが 1949 年の初版にはない。このことからも、第 3 版が改訂版として認識されていなかったことが分かる。

（2）主枝の方向

主枝の方向が全て水平であれば「全水平枝」（図 4–10）、上向や下向の枝が混じると「一部水平枝」（図 4–11）となる。一谷ら（1968）が、幹に対して直角に枝が出ている特徴をとら

えて「直交枝」と命名して以来、使われることが多い。しかし、直交では判断基準に誤解を与えやすいので原語の通りに「水平枝」とする。コッホの模式図（図 4–10・11）では幹に枝が直角に交差しているが、筆者の経験では幹に枝が交差（図 6–2）することは幼児でさえも非常に稀であり、稚拙な描線あるいは粗雑な描線で描かれている場合でさえも交差しない（図 6–3・4）。催眠下で描かれたバウム（図 1）でも、幹と枝は交差していない。

次に、「十字型」については「木は元来、十字の基本形を示し、側枝が偏平だと十字が生じる」と述べられているように、十字架のように幹と一対の水平枝から成る純粋な「十字型」と、「十字型」が含まれる場合まである。「十字型」の基準としてわが国では「幹と枝が直角に交差」（『バウム・テスト整理表および手引』1980）、あるいは「幹と枝が十字に交差」（中田 1982）しているものと説明されて実際に交差した模式図が示されているが、前述したように文字通り幹に交差した枝が描かれることは非常に稀であり、枝が幹に交差することは必要条件ではない。「十字型」とは、左右の水平枝の付根が同じ高さであればよい。

(3) 主枝の形状

枝が直線で描かれていると「まっすぐな枝」となり、水平枝や十字型、直交分枝は「まっすぐな枝」に含まれる。因みに、幹上直・水平枝・十字型・直交分枝以外の直線による角ばった表現を示す指標として、「直線で角ばった形」（図 4–51）がある。

(4) 枝先の処理

枝先が閉じられていないのが「枝先開」（図 4–12～14）で、「幹上直」のように閉じられているのが「枝先直」（図 4–3）である。「枝先直」に関しては、一線枝・水平枝・直交分枝のように“全”か“一部”の区別はない。

(5) 主枝の位置

自然の木では成長するにつれて下枝が消失する。バウムにもこの現象が生じることにコッホは着目し、下枝が消失しないで残っている、つまり幹先から根元まで枝が描かれているバウムを「地面までの枝」と命名したが、指標名を「根元までの枝」（図 4–15　図 5–1）とする。判定基準は、枝が根元付近まで描かれていることのみである。しかし、枝が水平枝であること（一谷ら　1968）や水平枝でなくてもよい（朝野　1973）、一線枝が描かれていること（中田 1982）のようにわが国の判定基準は混乱している。また、『バウム・テスト整理表および手引』（1980）では、枝の方向は問わないが一線枝に限定した「根元までの一線枝」が設けられている。「根元までの枝」は、全水平枝や全一線枝が描かれる発達段階において出現しやすいが、水平枝や一線枝であることが必要条件ではない。

「根元から出た枝」（図 4–16）は、幹先から根元まで連続して枝が描かれているのではなく一部の下枝が残っている状態をいう。根元近くに残った下枝が典型例であるが、樹冠の下の根元付近とはいえない位置に冠下枝が描かれることもあるが、筆者は「根元から出た枝」に含めている。ところで、初版では指標名の枝は単数形で表記され、さらにこの指標は発達指標として扱われ、英語版でも同様であった。しかし、第 2 版になって、枝は複数形で記され、この指標は「早期型」には含まれていない。つまり、「根元までの枝」は早期型であるが、「根元からでた枝」はどの年齢でも出現する指標である。

さて、幹の周囲から派生した枝がバウムとして描かれるときには、枝は幹の両側から左右に伸びる側枝として描かれるのが一般的である。自然の木では幹の周囲から枝が生えているので、幹の正面の位置にも枝が描かれても不思議ではない。しかし、三次元表現ができる段階の被検者のバウムであっても、幹の正面の位置に枝のつけ根がある前方に突き出た枝が描かれていることは少ない。それ故、コッホは他者とは違う視点があるからこそ前方に突き出た枝が描かれると考え、三次元表現で描かれているので

「三次元」[8]（図 4–17　図 5–2）と命名したのであろう。

ところで、コッホは、一般的な意味での三次元表現を指す指標を特に設けていないが、描画能力の発達に応じて幹・枝・実に立体感や遠近感として三次元表現が生じる。枝では、枝の付根や枝と枝との重なりにも三次元表現が現れるので、この意味での三次元表現と区別するために、「三次元」の指標名を「前方に突き出た枝」とする。

『バウム・テスト整理表および手引』では、「枝立体描写」と「前方突出枝」が共に採用されている。前者は「主枝が三次元的に表現されているもの」で、「前方に突き出た枝」と判定できる模式図が示され、後者ではコッホの模式図（図 4–17）が指示されているのみで、模式図からは両者の区別は困難である。「前方に突き出た枝」は一般的な意味での枝の三次元表現と間違われやすく、コッホの意図通りに理解されていたのは、筆者が調べた範囲では佐藤ら（1978）の研究のみであった。

さて、三次元の表現能力がまだ発達していない段階においては立体表現を伴わない「前方に突き出た枝」（図 6–5・6）が出現する。それ故、筆者はこの指標を二次元と三次元に分けてチェックしている。

なお、巻末の指標名には「（目を除く）」が付記されているが、この目は「前方に突き出た枝」が切断されてできた切り口を指し、「正面の枝の切り口」（図 4–53）は指標として扱われている。

（6）分枝

全ての分枝が主枝に対して直角の方向に伸びているのが「全直交分枝」（図 4–18・19）、一部であれば「一部直交分枝」である。原語は“Winkelast（角（カド）のある枝）”だが、一谷ら（1968）以来使用されて馴染んでいるので「直交分枝」とする。

初版では“Winkelast”という指標名ではなく、角ばった枝や直角に分岐した枝は「直線で角ばった形」（図 4–52）として扱われた。英語版になって、直角に分岐した枝は“The angular form of the crown（角ばった樹冠）”（図 4–18）となり、16 番目の発達指標になる。直角方向に分枝が次々に描かれて樹冠が構成されることから、この指標は「積み重ね」表現として英語版では扱われた。しかし、第 2 版からは「積み重ね」ではなく「直交分枝」と命名され、第 3 版になると「直交分枝」の見出しに早期型が付記され、この指標が「早期型」としての特徴をもつことが強調された。なお、初版の「直線で角ばった形」の中の角ばった枝は、第 3 版においても「直線で角ばった形」（図 4–51）として残された。

ところで『バウム・テスト整理表および手引』では、枝（主枝を指す）の方向に着眼した指標として「直交枝」が、分枝の方向に着眼した指標として「直交分枝」が採り上げられている。前者の「直交枝」には日本語版の模式図、すなわち「直交分枝」の模式図が、後者の「直交分枝」には一谷ら（1968）が「直交分枝」と命名した指標の特徴を示す事例が指示されているので両者は同じ指標である。“The angular form of the crown”がドイツ語で“Winkelast”と表記されただけのことなのに、『バウム・テスト整理表および手引』では一つの指標に対して「直交枝」と「直交分枝」という異なる指標名を与え、前述した「幹上直」と同様なミスが生じている。さらに、一谷ら（1968）で使用された「直交枝」（ここでは「水平枝」の意）と『バウム・テスト整理表および手引』での「直交分枝」との関係について何も言及されていない。そのため、小林（1990）のように『バウム・テスト整理表および手引』に準拠して「直交分枝」を指す場合の「直交枝」と、一谷ら（1968）以来使われている「水平枝」の意味での「直交枝」という同名異種の指標名が存在しているので注意しなければならない。

「逆向きの分枝」（図 4–20）とは、分枝が互いに反対方向に伸びている場合をさす。主枝が

互いに反対方向に伸びている場合との混同を避けるために、「逆向きの分枝」とした。これの判定基準は、本文や模式図では分かりにくかったが事例（図 5–3）で「特に左側の分枝によく見られる」と説明されていたので理解できた。

3　樹冠の形や構成

「日輪型・花型」は第 2 版で追加された早期型に関する指標である。樹冠部分が図式的な太陽で描かれたのが日輪型（図 4–21）、同様に図式的な花で描かれたのが花型（図 4–22）である。

「陰影で表わした樹冠」（図 4–23）は、陰影が斜線で表わされ、しかも樹冠の輪郭や冠内枝のない樹冠が模式図として描かれている。本文中には解釈仮説だけが列記され、文章による説明はない。巻末の指標名に（枝なし）と付記されているので、少なくとも冠内枝のない樹冠であることは確かと言える。実際に樹冠の内部が陰影で塗りつぶされる場合もあるが、輪郭の有無は条件ではないと考える。この指標は、本文中では「黒塗りの幹」の次、「黒塗りの枝」の前に採り上げられ、巻末では「黒塗りの幹」・「黒塗りの枝」の次に位置しているが、陰影と黒塗りは明確に区別されねばならない。

「クーゲルクローネ」（図 4–24）は、木の樹冠部が輪郭で表わされたもので、Kugel（ボール）であっても中島（2006 b）で述べたように円形（ボール冠）に限定されることはない。本文中の指標名には（閉じられた形）が付記されていることからも「クーゲルクローネ」の典型は閉じた輪郭である。「クーゲルクローネ」と指摘されているコッホの 3 事例（図 5–4～6）では、冠内分化が乏しい。このことから、樹冠の輪郭が閉じられた形でしかも冠内分化が十分でない樹冠（浮遊枝程度は可）を指すと筆者は今のところ理解している。複雑な枝組みと生い茂る葉から成る樹冠部を輪郭だけで簡略に表現する様式を指す可能性が高く、T 幹の模式図（図 4–1）のように冠内に幹や枝が描かれている場合は、輪郭が描かれていても「クーゲルクローネ」に該当しないであろう。

現状では指標名はとりあえず「クーゲルクローネ」とし、冠内の分化度が乏しい場合とそうでない場合とに分けて筆者はチェックしている。

「巻き毛のような樹冠」（図 4–25）は、カールした髪のような動きのある線で樹冠が描かれているもの。筆者は、螺旋で塗りつぶされた樹冠（図 6–7）は経験するが、模式図のようなコイル状の線はほとんど経験したことがない。描線に動きが感じられないのが「陰影で表わした樹冠」、リズミカルな動きが感じられるのが「巻き毛のような樹冠」、動きがあっても混乱している場合が「なぐりがきの樹冠」（図 4–26）である。この 3 つの指標での描線の動きはそれぞれ異なるが、冠内分化が乏しい点は共通している。

4　実・葉・花

（1）実や葉や花がそれぞれ具体的に描かれているのが「実」（図 4–27）、「葉」（図 4–28）、「花」（図 4–29）である。ただし、「実」についてはコッホも事例で示しているが、丸い形で表現されることもある。また、幼児では葉が半円で表わされる（図 6–8）こともあるので明細化される前の段階の葉として筆者は扱っている。

（2）場所

実や葉が枝にぶら下がる形で描かれるのではなく、幹の中に描かれるのが「幹の中の実や葉」（図 4–5）である。この指標は、幹の形状が「幹だけ・幹と付属の枝」の場合に多いが、幹の中だけではなく幹の周囲にも現れる（図 6–9）。

「空中の実」（図 4–30）は、実が樹冠内に浮いているように描かれている場合をさす。巻末の指標名には（クーゲルクローネ）が付記され、コッホの調査では初等学校 3 年生以降ではほとんど出現せず、事例（図 5–5）においても冠内枝のない樹冠に描かれた実である。このこ

とから、コッホの「空中の実」は冠内の分化度の低い樹冠に描かれた実に限定される可能性が高い。

(3) 大きさ

実や葉の大きさについては、相対的に大きすぎる場合に「大きすぎる実や葉」(図 4–31) とする。

(4) 付き方

実や葉が空間の相互関係を無視して描かれている場合 (図 4–32) で、コッホは幹の中に描かれた場合 (図 4–5) も空間倒置としている。

(5) 2 種類以上の実

「樹冠における主題の変化」については、本文中には記述や模式図はなく、初版や第 2 版でも同様だった。しかし、その指標名から「1 本の木に 2 種類以上の実が描かれた場合」とした。

5 根

根が一本線で描かれているのが「一線根」で、二本線で描かれるのが「二線根」(図 4–33) である。根では、枝や直交分枝の場合のような「一部一線根」はない。

6 表現

(1) 黒塗り

黒塗りされている部位に応じて「黒塗りの幹」(図 4–34)、「黒塗りの枝」(図 4–35)、「黒塗りの実や葉」がある。ところで、樹冠に関する指標としては陰影 (斜線) や巻き毛のような線、あるいはなぐりがきで描かれた樹冠などが挙げられているが、黒塗りの樹冠は指標としては採り上げられていない。しかし、黒塗りは幹や枝や実や葉以外の部位に黒塗りの樹冠や黒塗りの地面としても出現する。また、黒塗りの程度は濃いものから薄いものまで、幹や樹冠の全面が塗りつぶされたものから部分的に塗られたものまである。黒塗りに類似した表現である陰影も含めて、今後整理する必要がある。

(2) 落下表現

「落ちる／落ちた実や葉や枝」(図 4–36) は、初版と英語版では、「落ちる葉」と「落ちる実と落ちた実」の 2 つの指標であったが、第 2 版から枝を加えて 1 つの指標としてまとめられた。しかし、模式図については、初版・英語版と同じ図が使われている。

(3) さまよい

「さまよった長すぎる枝」の模式図 (図 4–37) には、主枝よりも長い分枝のある枝とそして長すぎてさまよった形をした枝の 2 種の図が示されている。この指標の前身は、初版の「主枝より長い分枝」(図 4–38) であり、分枝の長さが主枝よりも長いことがその指標の特徴であった。しかし、英語版からは単に長くそして曲線で描かれているだけではなく、そこに「さまよう」という特徴を追加して、“Branches growing overlong and straying in the room (長すぎて空間をさまよう枝)” (図 4–37) と、“crown in flag style (trail of smoke) (旗型の樹冠 (煙のたなびいた形))[9]” (図 4–54) と、そして “Crown in flag style combined with confusion of line (混乱した線を伴う旗の形をした樹冠)” の 3 つの指標が生まれた。その後、第 2 版・第 3 版へと引き継がれ、“Branches growing overlong and straying in the room” は “Schweifungen, überlange Äste (さまよった長すぎる枝)” に、“Crown in flag style combined with confusion of line” は、“Schweifungen、Raumfüllungen (さまよって空間をうめる) となって 58 指標に含まれることになった。「さまよって空間をうめる」には模式図は添えられていないが、本文中に「もつれた線を伴う旗のように長くたなびく煙の形をした樹冠」の事例 (図 5–7) を参照せよとの指示があったことから、もつれたような一線枝で空間が埋めつくされている樹冠を指し、「なぐりがきの樹冠」とは明らかに異なることが分かった (中島　2007)。

また、英語版の “crown in flag style (trail of smoke)” は、第 2 版からは「さまよい」の例として早期型に採り上げられている。

(4) 切断表現

切断された、あるいは折れた状態は「切断された枝（図 4–39）・折れた枝・折れた幹」にまとめて出現率が求められている。解釈仮説が異なる特徴を一つにまとめたのは、個々の指標の出現率が高くないので便宜的にまとめたのかもしれない。また、初版にはあった「切断された幹」がここに含まれていない理由は分からない。

(5) 積み重ねた描き方

「積み重ね」[10]（図 4–40）は、建増し建築のように上へ上へと積み重ねる描き方を指す。初版では「建増しされた枝」（図 4–41）だけであったが、英語版から樹冠が多数の葉で構成された模式図が追加され、指標名も「積み重ね」となる。「積み重ね」は前述の「さまよい」と同様に、ある程度の早期型とみなされている。

ところで、コッホは多数の葉から構成された樹冠も葉の「積み重ね」として位置づけているが、これについては「積み重ね」とは別個に「強迫的な表現」を設けて分類する方が適切ではないかと筆者は考えている。幼児において、枝や幹[11]が継ぎ足されて描かれることは珍しくないが、多数の実や葉を描いて樹冠を構成するという描き方は、筆者の経験では枝や幹よりもはるかに少ない[12]。そのため、「積み重ね」をある程度の早期型とみなすのであれば、実や葉を多数描いて樹冠を構成する場合や、あるいは樹冠の内部を多数の実や葉で埋め尽くす描き方を「強迫的な表現」に分類するのが望ましいと考えている。

(6) 常同的な描き方

「ステレオタイプ」（図 4–42）は実や葉は分枝が繰り返し常同的に描かれる場合で、早期型に含まれている。「積み重ね」の日本語版での説明箇所（p. 81）に「くり返してかかれた枝」の記述があるためか、「ステレオタイプ」の枝に間違われることがある。枝の「積み重ね」は、上へ上へと繰り返し描かれる場合である。

(7) いびつな形

素直に引かれた描線ではなく、震えた描線（ただし、運動失調による手の震えとは無関係な震え）で描かれたために歪な形になり奇異な印象を与えるのが「変質型」であり、事例（図 5–8・9）にその特徴が示されている。

7　木以外の描き込み

(1) 木以外の描き込み

描き込まれたものに応じて、「小さな杭や支柱」（図 4–43）、「はしご」（図 4–44）、「有刺鉄線で保護」、「付属物」（図 4–45）がある。「付属物」は鳥の巣箱やハート型のものなどのように木に付いているものを指す。「多くの風景」（図 4–44・46）は太陽や雲や柵や地平線などが描かれている場合である。

(2) 地平線・地面

「風景の暗示」は地平線や地面が描かれている場合を指す。「丘や島の形」（図 4–47）は初版では丘の形だけで、英語版から島の形も追加された。

以上、コッホの 58 指標の判定基準を第 3 版に準拠して紹介した。

Ⅳ　今後の課題

58 指標の判定基準を第 3 版に基づいて紹介したが、これはコッホのバウムテストを理解するための出発点に過ぎない。今後は、バウムテストの解釈仮説を理解するためにコッホが遺した膨大な出現率に関する資料を検討する予定である。

バウムテストは、実施法が簡便でしかも幼児から高齢者までを対象にでき、得られる情報も多いので、1961 年にわが国に導入されて以来、広く普及した。しかしながら、本稿で述べたように未だにバウムテストに関する基本的な用語の整理は不十分で、混乱がみられる。

今日では、医療・教育・産業などの領域で心理アセスメントにおける心理検査法として、あ

るいは効果測定や集団比較の尺度として、さらに心理療法におけるコミュニケーションの手段としても利用されている。このようにバウムテストは、専門性は異なるが子どもや成人を対象とする多くの専門職によって利用されている。だからこそ、バウムテスト研究の成果を利用者間で共有するために、使用する用語を整理するという基本的な事柄を解決しておかなければならない。

本稿が 58 指標の指標名と判定基準の共通化のための叩き台となり、わが国に相応しい新たな指標や、わが国独自の解釈仮説が検討されることを期待したい。

注

1）本研究の一部は、平成 19–20 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 19530643）の助成を受けたものである。

2）これまでは、バウムテストの教示によって描かれた木の絵のことを口頭では「バウム」、書き言葉としては“baumzeichung”の訳語としての「バウム画」を使用してきたが、今回からは共に「バウム」とする。

3）当時、入手できたのは非改訂第 7 版だった。

4）コッホは 1958 年に病没したので、第 3 版以降の版は第 3 版の重版である。ただし、第 9 版からはアフリカ人に関する記述が一部削除されている（岸本　2007）ので第 9 版以降は第 3 版の修正版といえる。本稿では、コッホの最後の原著という意味合いで、第 3 版以降の版を全て第 3 版と称する。現在、入手可能なのは第 10 版（2000）、第 11 版（2003）。

5）巻末の指標名と、本文中の表の指標名の表記が異なる場合があるが、指標の理解に特に影響はない。

6）国吉は日本語版の補遺（p. 112）において、Der Baumtest : Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. Hans Huber, Bern u. Stuttgart, 1949. をコッホのドイツ語原著として本文中に紹介しているが、1949 年の真の初版としては書名・サブタイトル・発行地の表記が正確ではない（正確な書誌情報は、本稿の文献欄参照）。しかし、1962 年の論文では初版と第 3 版がそれぞれ区別して引用され、文献欄には第 3 版の書誌情報が正確に記されている。しかしながら日本語版作成時に、コッホのドイツ語原著を 1949 年発行の 1 冊に限定し、改訂版である第 3 版を何故、それに強引に置き換えたのか解らない。

7）目次には「円錐幹」の見出しはあるが、本文中では欠落。

8）本文（p. 185）では、三次元の後に「(正面の枝)」が付記されている。

9）第 2 版・第 3 版では、「旗のように長くたなびく煙」と表現されているが、指標名としては、わが国で使われている「吹流し（型）冠」が適切であろう。

10）日本語版では、“重積”が使われ筆者も使用していたが、重積という言葉は『広辞苑』にないので「積み重ね」に改める。

11）第 3 版の事例の説明箇所（p. 240）では、幹の積み重ねについてコッホは触れているので、枝と葉だけに限定されていないと考えられる。

12）中島の樹型分類（2008）で「その他の樹型」の下位分類である「むら葉冠」と「むら実冠」（葉や実を多数描いて樹冠を構成するが、樹冠の輪郭はなし）に分類される樹型の出現率は、小学生（小 1～小 6 の健常な延べ 1,636 名の児童）で 0.49％、就学時健診を受診した 528 名の幼児で 0.95％、3 歳児クラスから 5 歳児クラスに在籍する健常な幼児延べ 2,459 名においては 0.37％であった。

文献

朝野浩（1973）：精神薄弱児の描画の発達、『バウム・テストの臨床的研究』、日本文化科学社、Pp. 119–162.

一谷彊・林勝造・津田浩一（1968）：樹木画テストの研究－Koch の Baumtest における発達的検討－、京都教育大学紀要　Ser. A., 33, 46–68.

一谷彊・津田浩一（1982）：『バウム・テスト整理表』の作製とその具体的利用、京都教育大学紀要　Ser. A., 61, 1–22.

岸本寛史（2005）：『バウムテスト第三版』におけるコッホの精神、バウムの心理臨床、創元社、Pp. 31–54.

岸本寛史（2007）：バウムテスト輸入時の問題点とコッホの思想の再評価、平成 17～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書.

小林敏子（1990）：バウムテストにみる加齢の研究

－生理的加齢とアルツハイマー型痴呆にみられる樹木画の変化の検討－、精神神経学雑誌、92（1）、22–58.

Koch , K .（1949）：*Der Baum-Test : Der Baumzeichen-versuch als Psychodiagnostisches Hilfsmittel.* Bern, Verlag Hans Huber.

Koch, C.（1952）：*The Tree Test－The Tree-drawing Test as an Aid in Psychodiagnosis－*. Bern, Hans Huber.

C．コッホ／林勝造・国吉政一・一谷彊訳（1970）：バウム・テスト－樹木画による人格診断法－、日本文化科学社.

Koch, K.（1954）：*Der Baumtest : Der Baumzeichen-versuch als Psychodiagnostisches Hilfsmittel.* Zweite umgearbeiete Auflage、Bern und Stuttgart, Verlag Hans Huber.

Koch, K.（1957）：*Der Baumtest : Der Baumzeichen-versuch als Psychodiagnostisches Hilfsmittel*. Dritte umgearbeitete Auflage、Bern und Stuttgart, Verlag Hans Huber.

Koch, K（2000）：*Der Baumtest : Der Baumzeichen-versuch als Psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 10. Auflage, Bern・Göttingen・Toronto・Seattle、Verlag Hans Huber.

Koch, R. 私信：中島ナオミ宛の手紙　1986 年 1 月 18 日付け

国吉政一・小池清廉・津田舜甫・篠原大典（1962）：バウムテスト（Koch）の研究（1）－発達段階における児童（正常児と精薄児）の樹木画の変遷－、児童精神医学とその近接領域、3（4）、237–246.

国吉政一・林勝造・一谷彊・津田浩一・斎藤通明（1980）：バウム・テストト整理表とその手引、日本文化科学社.

中島ナオミ・塚口明・松本和雄・家常知子（1982）：幼児のバウムテスト－樹型分類を中心にして－、大阪府立公衆衛生研究所報精神衛生編、20、29–41.

中島ナオミ（1983）：幼児のバウムテスト（第 2 報）、大阪府立公衆衛生研究所報精神衛生編、21、13–23.

中島ナオミ（1984）：幼児のバウムテスト（第 3 報）－樹型分類と項目－、大阪府立公衆衛生研究所報精神衛生編、22、21–32.

中島ナオミ（1985 a）：コッホの原著（未邦訳部分）の紹介－特に発達過程について－、第 60 回バウム研究会での発表　1985 年 1 月 19 日.

中島ナオミ（1985 b）：Koch の原著“Der Baum-test”とその英語版との比較対照による検討（第 1 報）、大阪府立公衆衛生研究所報精神衛生編、23、27–40.

中島ナオミ（1985 c）：バウムテスト日本語版の再検討、第 63 回バウム研究会での発表　1985 年 10 月 12 日.

中島ナオミ（1986 a）：日本におけるバウムテスト研究の問題点について　大阪精神衛生、31、22–34.

中島ナオミ（1986 b）：『バウム・テスト－樹木画による人格診断法－』における問題点－ドイツ語原著との比較対照より－、日本心理臨床学会第 5 回大会抄録集、170–171.

中島ナオミ（2002）：わが国におけるバウムテストの教示、臨床描画研究、17、177–189.

中島ナオミ（2006 a）：『バウム・テスト－樹木画による人格診断法－』の問題点、臨床描画研究、21、151–168.

中島ナオミ（2006 b）：コッホの早期型（Die Frühformen）の紹介－、日本心理臨床学会第 25 回大会抄録集、299.

中島ナオミ（2007）：コッホの 58 指標について、日本心理臨床学会第 26 回大会抄録集、255.

中島ナオミ（2008）：バウムテストにおける樹型の分類、関西福祉科学大学紀要、11、123–137.

中島ナオミ　私信：レグラ・コッホ女史宛の手紙　1985 年 4 月 10 日付け

中田義朗（1982）：バウムテストの基礎的研究（Ⅱ）児童の樹木画の発達－教示を変えた場合の発達指標の再検討（2）－、西宮市立教育研究所紀要、214、36–47.

佐藤正保・青木健次・三好暁光（1978）：大学生に集団的に実施したバウムテストの量的分析の試み（第 1 報）、臨床精神医学、7（2）、207–219.

山中康裕・中井　幹（1970）：学童の精神医学的追跡調査と学校内力動－Baumtest（Koch）および人物画テストを中心に－、名市大医誌、21（1）、70–83.

吉川公雄（1978）：人間生態学－生物としての認識からの出発－、東海大学出版会.